足元から eco! ⑥1

水俣新市庁舎、カーボンフリーの夢

小林　光
元環境事務次官、慶應義塾大学政策・メディア研究科特任教授、博士（工学）

6月下旬にアメリカから帰ってきた。今度は、日本の都市のエコな取り組みをいくつか報告してみたい。まずは、水俣である。

慶應義塾大学では、ＡＳＥＡＮ各地の大学とタイアップして毎夏に内外の学生を熊本県の水俣に引率し、フィールドワークをして地域再生の提案をさせている。今年は、6ヵ国15人の学生が参加して、ＪＮＣ（持株会社化したチッソの事業子会社）を訪問したり、胎児性患者の話を聞いたり、環境共生的な産業活動を見学したりなどした。こうした中、私が関心を持ったのは、一つには、環境共生的な新・市庁舎の基本設計が始まったことである。

水俣市庁舎（本館）は1960年建築で、老朽化が進んでいたところへ一昨年（2016年）の熊本地震で構造軀体に亀裂が入るなど被災した。そこで、近傍にプレハブ庁舎を建てて執務室は引っ越しし、新庁舎建設に向け検討を急ぐことになった。

水俣市は水俣病問題を克服していくことを契機に、優れた環境の下、活き活きとした暮らしや産業活動が展開される環境都市づくりを目指した。有名な、市民が参加して行う徹底的な資源ごみの分別回収などの取り組みに基づき、2011年には、民間環境団体から環境首都の称号も頂戴した。こうしたブランディングなり、市民から支持されている発展の方向付けから、新市庁舎が高い環境性能を目指すことは必然の成り行きであった。

市は2017年8月、新庁舎建設の基本構想を発表し、基本設計等の委託先を決めるため、プロポーザルへの参加を設計会社に求めた。この基本構想では、基本理念として、「市民の安全・安心を確保し、誰もが使いやすい、環境に配慮した庁舎」を掲げ、それをブレークダウンした基本方針では、災害からの安全、市民サービスの向上、ユニバーサルの観点も含めた市民誰にでも親しまれる庁舎、容易な維持管理、そして環境保全の5本柱が示された。

この構想を受けて7社の設計企業体が応募し、18年3月、久米設計と地元のＫＡＹ建築設計事務所の共同企業体のアイディアが最優秀とされて基本・実施設計者に選ばれた。以下は、この設計者が提案したアイディアである。最終的にこれらのアイディアが基本設計に残るかは、まだまだ市議会や市執行当局の判断があって流動的な段階だが、論者として関心のあるところをかいつまんで紹介したい。

水俣市新庁舎模型案

まず、写真のように、市庁舎が低層ながら広いテラスを持って周辺の川辺や背景の山に溶け込むような、自然に親和的な空間を作っていることが注目される。設備や構造面では、詳しくは省略するが、今日考えられる環境対策をほぼ網羅し、ＣＡＳＢＥＥ※のＳランクを目指す点に好感が持てる。

そして論者として最も評価するのは、地域の自然資源を積極活用しようとする点である。地産の木材の利用は当然として、さらに、水俣の名前から想像できるように、当地は水の豊富な土地柄であり、この点を活かして、地下水との熱交換による冷暖房の補助が考えられていて良いアイディアである。また、画期的なことには、市庁舎の運用面でカーボンフリー電力の全面的な活用が考えられている。これは、チッソがその水俣工場で使う電源をすべて同社の水力発電所で賄った上に多量の余剰電力を九州電力に売却していることに着目したもので、そのカーボンフリー電力を、新電力小売り会社を経由して市役所に供給する構想である。

米国チャタヌーガでは、良質の作り込みの水族館が再生の起爆剤になった。また、ボールダーでは優れた環境取り組みがさらなる環境取り組みを呼び寄せていた。水俣では、環境親和的な新庁舎がまちづくりに弾みをつけるに違いない。

※ＣＡＳＢＥＥとは、建築物の環境や快適性等の性能を客観的に評価する仕組みであり、Ｓランクとは、その最上位評価であることを示す。